

べるよう依頼された。すでに工事が始まっている段階であったが、ベニオグラコウホネをはじめとする貴重種もあるため、埋め立てをせず、できる限り野生動植物のすみかとして残すのがよいとの意見を述べた。道路の工事後、池は小さくなったものの、埋め立てや極端な水質汚濁は免れている。

西条町上寺家のマコモ池（仮称）は、1987年には浅い水がたまっていた（写真3）。現在は池の下は全て住宅地になり、池の水は抜かれている。写真3には浅い水中に生育するマコモやガマが見えるが、現在は水のない池一面にマコモとヨシが繁茂している。西条盆地の様々な変化が池にも影響を与えており、池の維持管理や池の生物の保全は、いろいろな面で難しい問題である。

全国集会の筆者の発表で、西条盆地には、オグ

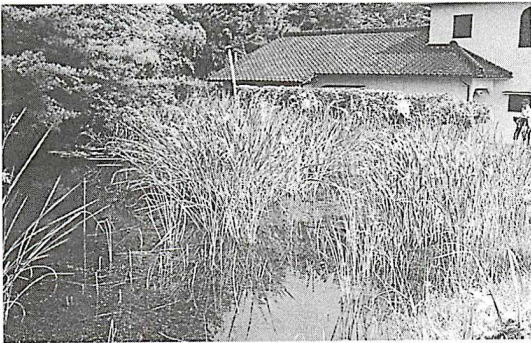


写真3. マコモ池（1987年8月2日）。

ラコウホネとコウホネの記載とよく一致するが赤い柱頭盤をもつ2種類のコウホネ類があることを報告した（下田，1987b）。これはその後、それぞれベニオグラコウホネ・サイジョウコウホネと命名し、新しい変種として記載した（下田，1991）。

全国集会の記念写真には、小さなお子さんを抱いた國井秀伸先生の姿もある。私の次男も國井先生のお子さんくらいであり、全国集会の時は実家にあずかってもらった。それがもう高校1年生になっている。一緒に世話人となっていたいただいた関先生は広島大学を退官された。全国集会はついこの間のことのようにであるが、やはり15年近くが経ったのだなあと、あらためて思っているところである。参加いただいた方々にご協力いただいた方々に、もう一度厚くお礼申し上げたい。

文 献

- 広島県（編）．1995．広島県の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブックひろしま—．広島県環境保健協会．
- 下田路子．1987a．水草研究会第9回全国集会報告．水草研究会報 29：2-4．
- 下田路子．1987b．西条盆地（広島県）の溜池の水草．水草研究会報 29：5-7．
- 下田路子．1991．広島県西条盆地のコウホネ属植物．植物地理・分類研究 39：1-8．

第10回全国集会（東京）をふりかえって

林 浩 二

関東での3回目となる第10回全国集会（1988年）は、東京都三鷹市の神代植物公園で行われた。手元のメモからふりかえってみる。

大滝末男先生から、創立10周年大会は東京で開催したいという強い意気込みの電話が、丸1年前！の1987年8月上旬にかかってきた。広島での総会

で次回開催は東京と決まり、大滝先生は8月末には日程（8月6日～7日）と会場（東京都立神代植物公園）の調整を終えていた。エキスカッションについては未定だったが、水草展の同時開催、10周年記念事業、記念号発行などのねらいもあるということで、当時は（財）日本自然保護協会に

勤務していたわたしに協力を依頼してこられた。

事務担当を引き受けたわたしは、前回（第5回水郷）よりも規模が大きくなり、検討事項も多くなると判断し、東京・茨城・千葉在住の数人の会員に準備委員会への参加を呼びかけるとともに、さらに加わる方を推薦していただいた。最終的には、大滝末男・相生啓子・片山舒康・土谷岳令・野原精一・林浩二・原茂樹・山崎史織（敬称略）の8名（他に協力者として齊藤英樹氏）で準備委員会を構成することとなった。これほど大規模な準備会はその後の全国集会にもなかったろう。準備会合も1987年12月、1988年1月・6月・7月と熱心に開き、さらに直前に現場を下見するなど、大変な作業量となった。どうしてこうまで手間と時間をかけたのか、準備委員としておつきあいいただいた方に、今となっては申し訳なく思うほどである。基本的には準備会にまかされているとはいえ、10周年記念大会ということでもあり、研究会事務局の角野さんとも連絡を密にしていた。

研究会の全国集会では、エクスカッションへの期待は小さくないように思う。そのエクスカッションが設定されていなかったにもかかわらず、会員の多い関東での開催ということもあり、宮城県から鹿児島県まで全国から61名の参加があった。

いつもの半日では討論時間が足りないので、今回は2日にわたってじっくり議論しようと、最終的にエクスカッションは行わないことになった。研究発表は「日本の水草相の変遷と現状」を中心

テーマに募集し、一日目の午後に8題、二日目の午前にそれぞれやや長い発表で3題の計11題となった。研究発表に十分な時間を割り当てたつもりだったが、討論時間はやはり不足気味だった。とはいえこの時の発表を中心として10周年記念号（33・34合併号）がきわめて充実した内容で1988年12月に刊行されたことは、喜ばしいことだった。

なお植物公園主催、研究会協賛の水生植物展が7月16日～8月14日の日程で開催され、睡蓮鉢での水草の展示、室内での写真パネル展示などに、大滝会長はじめ会員有志が協力した。

特に節約に努めたわけではないが、参加費から経費を差し引いて1万円余の残額が出た。これに集会への寄付（この回は特別で18万円もあった）をあわせて、事務局に運営資金としてゆだねた。現在とは違ってこのころは会は財政的に余裕がなく、事務局の角野さんからずいぶん喜ばれたことを記憶している。

研究会の10周年記念事業として国内の水草フロラ調査も検討されたが、この翌年（1989年）には日本初のレッドデータブック「我が国における保護上重要な植物種の現状」が（財）日本自然保護協会・（財）世界自然保護基金日本委員会から発行され、オニバスがその表紙を飾るとともに、水生・湿性植物の国内での減少傾向がはっきりと示された。そういう意味でも節目の年だったと言えるかもしれない。

暑かった夏の思い出 —第11回全国集会—

國 井 秀 伸（島根大学汽水域研究センター）

手元には、参加者を写した未使用の葉書が2枚だけ残されていた。平成元年のかもめ一である。10年以上も前の集会であるにもかかわらず、この

写真に写されている参加者の顔と晴れ渡った青空を見て、当日の様子がだんだんと蘇ってきた。

発表、宿泊、懇親会は宍道湖畔の「ホテルなに